

=== T A C S 情報 第7号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和6年7月9日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、17.9℃（対平年差+0.4℃）と平年並であった。

6月の平均気温は、23.2℃（同+1.8℃）と平年に比べかなり高かった。

7月1半旬の平均気温は、27.1℃（同+3.3℃）と平年に比べかなり高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、228.5mm（対平年比186%）と平年に比べ多かった。

6月の降水量は、150.0mm（同87%）と平年並であった。

7月1半旬の降水量は、67.5mm（同133%）と平年に比べ多かった。

(3) 全日射量

5月の平均全日射量は、18.0MJ/m²/日（対平年比98%）と平年並であった。

6月の平均全日射量は、20.3MJ/m²/日（同117%）と平年に比べかなり多かった。

7月1半旬の平均全日射量は、18.2MJ/m²/日（同119%）と平年に比べ多かった。

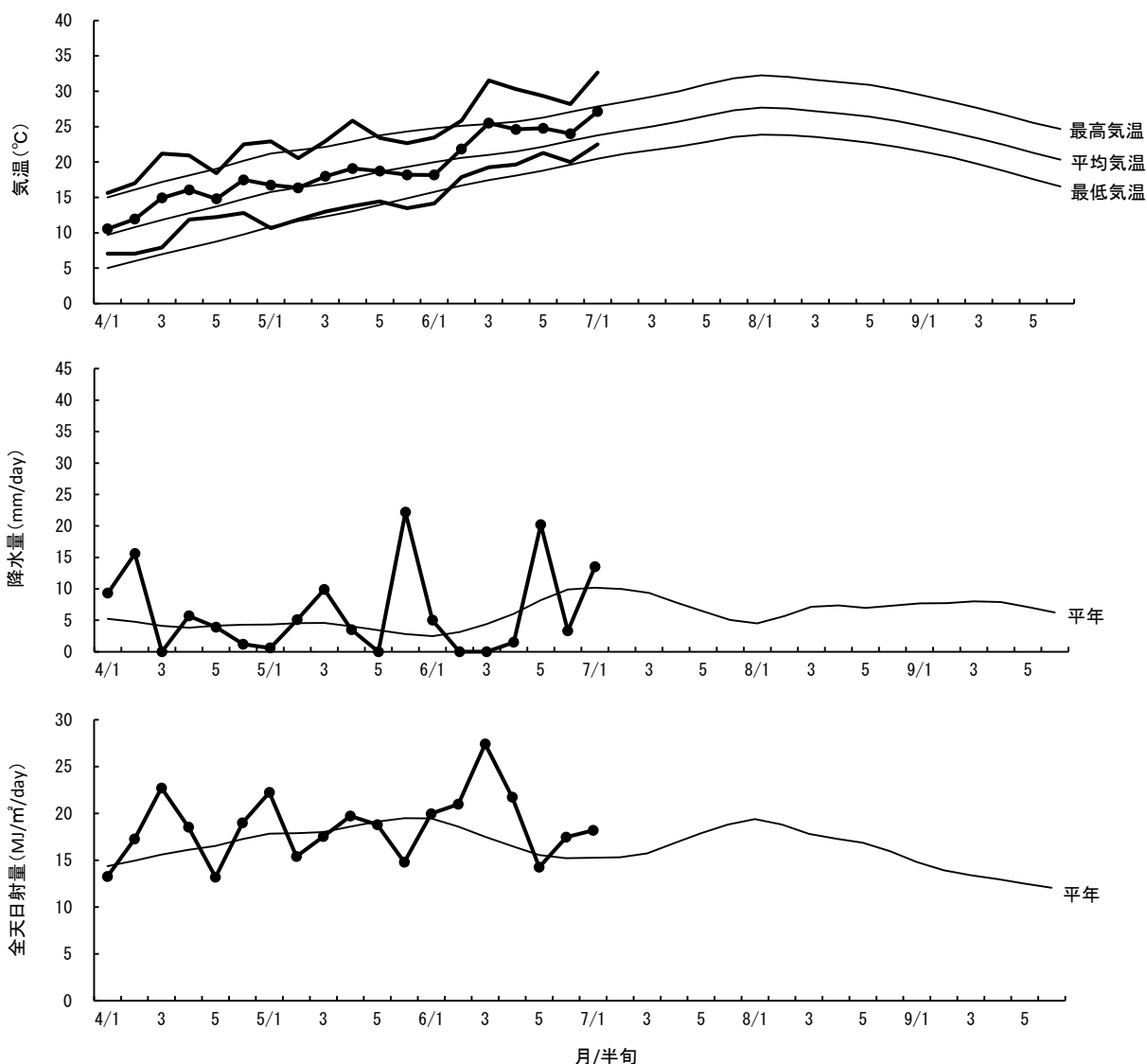


図1 令和6年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（1）コシヒカリ

平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色はやや淡く、葉齢は0.3葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色はやや淡くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ1日早い7月10日と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ1日早い7月31日頃と見込まれる。

表1 「コシヒカリ」の生育状況（7月9日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R6	5月14日	70.2	23.7	505	12.2	3.9	33.5	(7月10日)	(7月31日)
R5	5月13日	69.8	22.0	477	12.0	3.9	33.7	7月10日	7月30日
平年	5月14日	69.1	23.9	520	11.9	4.0	35.2	7月11日	8月1日
前年比・差	1	101	108	106	0.2	0.0	-0.2	(0)	(1)
平年比・差	0	102	99	97	0.3	-0.1	-1.7	(-1)	(-1)

注1) 平年 : H26~R5の平均

注2) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

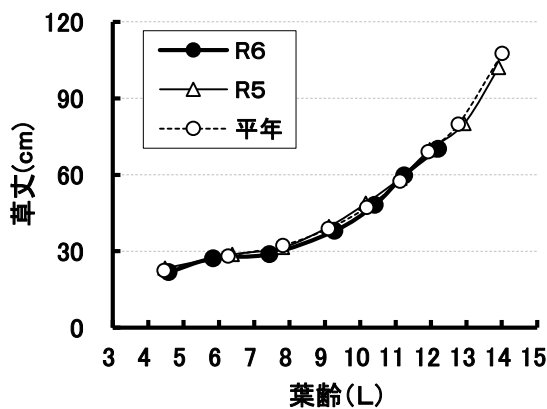


図2 草丈の推移（生観コシヒカリ）

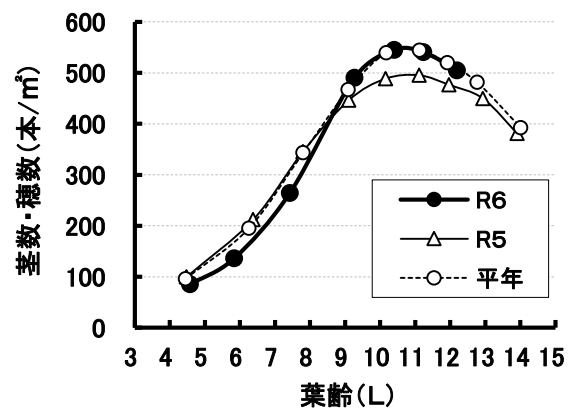


図3 茎数の推移（生観コシヒカリ）

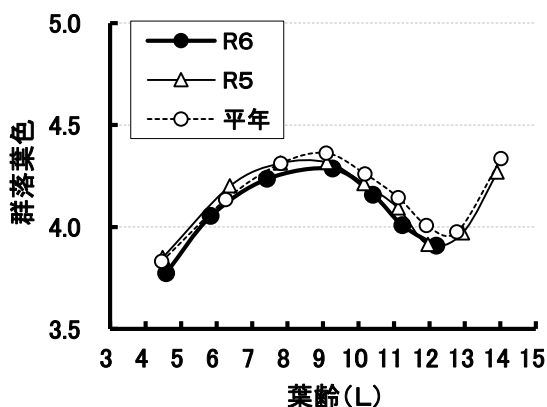


図4 葉色の推移（生観コシヒカリ）

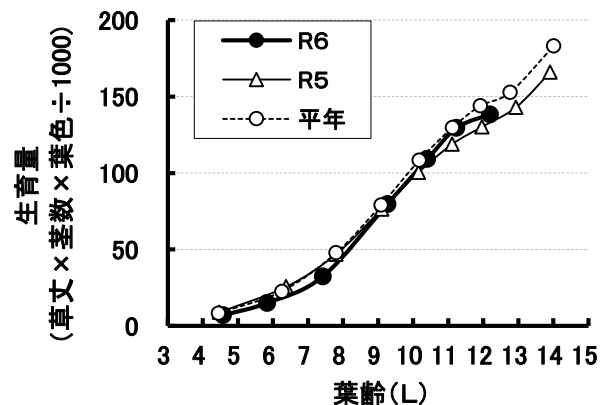


図5 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(2) てんこもり

平年に比べ、草丈はやや長く、茎数、葉色は並、葉齢は0.6葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色はやや淡くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ2日早い7月10日と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ2日早い8月1日頃と見込まれる。

表2 「てんこもり」の生育状況（7月9日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R6	5月8日	65.5	33.0	612	13.6	4.0	36.4	(7月10日)	(8月1日)
R5	5月10日	61.7	32.5	630	12.7	4.1	35.9	7月13日	8月2日
平年	5月8日	61.1	33.6	640	13.0	4.1	36.7	7月12日	8月3日
前年比・差	-2	106	101	97	0.9	-0.1	0.5	(-3)	(-1)
平年比・差	0	107	98	96	0.6	-0.1	-0.3	(-2)	(-2)

注1) 平年 : H26~R5の平均

注2) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

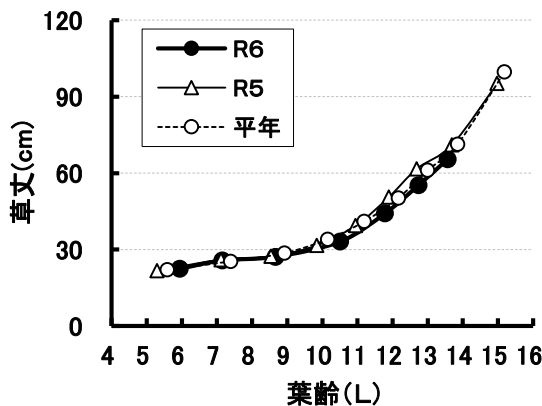


図6 草丈の推移（生観てんこもり）

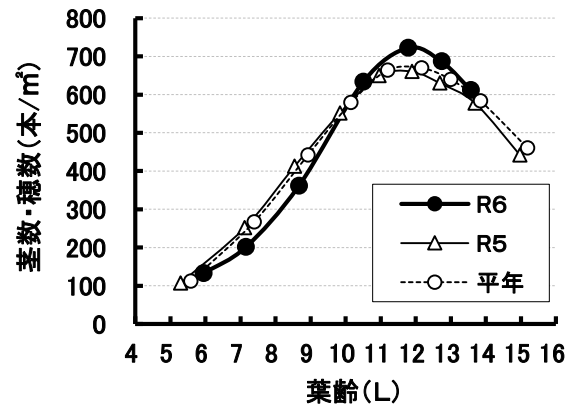


図7 茎数の推移（生観てんこもり）

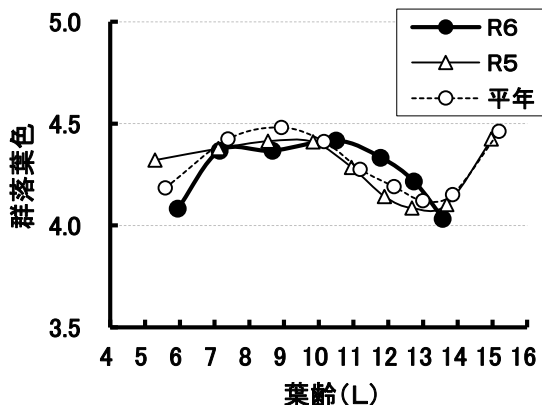


図8 葉色の推移（生観てんこもり）

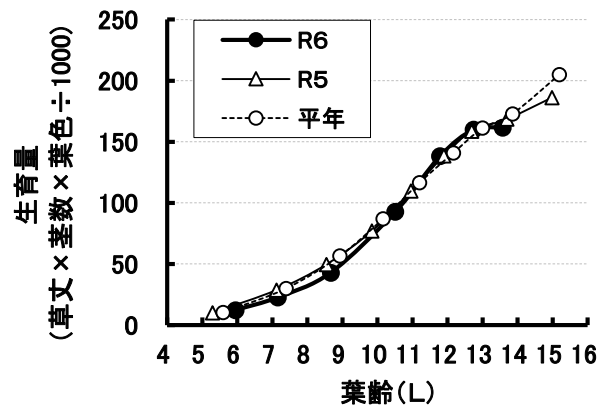


図9 生育量の推移（生観てんこもり）

3 当面の技術対策

- ・葉色が淡くなっているため、出穂期まで降雨に頼らず田面を乾かしすぎないように飽水管理を確実に行う。
- ・斑点米カメムシ類が多発しているため、早生品種の防除は、穂揃期（出穂後3～5日）と傾穂期（穂揃期防除の7日後）に確実に実施する。

(1) 「コシヒカリ」の管理

- ・稲体の活力を維持するため、出穂期まで飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。
- ・肥効調節型基肥栽培では、葉色が淡い場合は表3を目安に出穂3日前までに追加穂肥を施用し、穂揃期の葉色を4.2～4.5（砂壤土は4.5）に誘導する。
- ・分施肥栽培では、穂肥は幼穂形成期の生育量（表4）に応じて表5を目安に施用する。

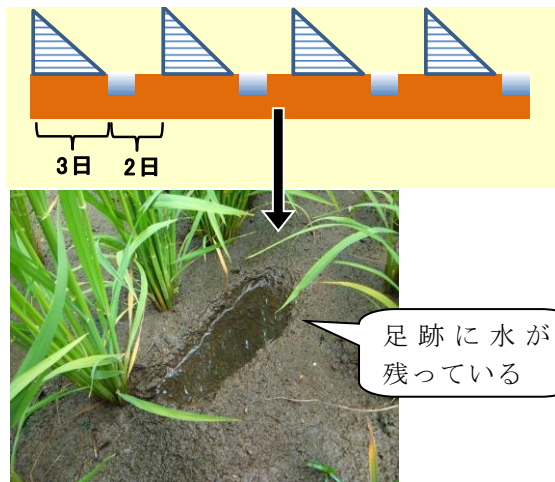


図10 飽水管理のイメージ

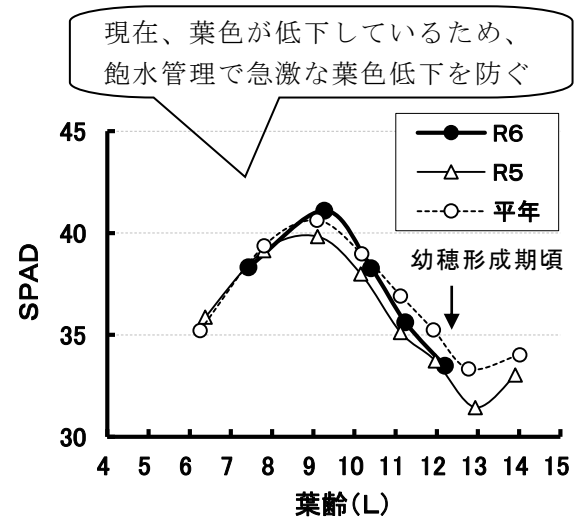


図11 葉色の推移（生観コシヒカリ）

表3 「コシヒカリ」の追加穂肥の目安（肥効調節型基肥栽培）

出穂7日前頃の葉色	追加穂肥対応
4.0以下（SPAD値32以下）	出穂3～7日前に
※砂壤土は4.2以下（SPAD値34以下）	窒素成分で0.7～1.0kg/10a
4.0より濃い（SPAD値32より高い）	無し
※砂壤土は4.2より濃い（SPAD値34より高い）	

表4 「コシヒカリ」の目標生育量（分施肥栽培）

	幼穂形成期	幼穂形成期から7～9日後 （幼穂長15mmの時期）
草丈	72cm	82cm
茎数	470本/m ²	430本/m ²
葉色	3.8	3.6

表5 「コシヒカリ」の穂肥施用量の目安（分施肥栽培）

幼穂形成期の生育量	1回目穂肥		2回目穂肥	
	時期	N施肥量 (kg/10a)	時期	N施肥量 (kg/10a)
適正	幼穂形成期7～9日後	1.5	1回目の7日後	1.5～2.0
やや過剰	幼穂形成期9～11日後	1.0～1.5	1回目の7日後	1.5～2.0
過剰	施用しない		出穂の7日前	1.5～2.0

※過剰：葉色が4.0以上で茎数が550本/m²

(2) 「てんたかく」の管理

- ・ 出穂期は、平年に比べ1日遅い7月16日頃と見込まれる。
- ・ 出穂期までは稲体活力を維持するため、飽水管理を行う。ただし、茎数が多く葉色が濃い場合は倒伏が懸念されることから、間断かん水を行う。
- ・ 肥効調節型基肥栽培では、割粃や倒伏を防ぐため、安易な追肥は原則施用しない。ただし、現時点で葉色が4.0 (SPAD値32)、砂壤土では4.2 (同34) より薄い場合は、出穂3日前までに窒素成分で1.0kg/10a程度の追加穂肥を施用し、穂揃期の葉色を4.2~4.5 (砂壤土は4.5) に誘導する。
- ・ 出穂後20日間は湛水管理を徹底する。

(3) 「てんこもり」の管理

- ・ 稲体の活力を維持するため、出穂期まで飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。
- ・ 幼穂形成期頃に葉色が4.0 (砂壤土では4.2) を下回らないよう、葉色が薄いほ場では、直ちに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

(4) 病虫害防除の徹底

ア 斑点米カメムシ類

7月1日注意報発令

- ・ 畦畔や雑草地等ではイネ科雑草の穂が出ないように草刈りし、カメムシ類が発生しにくい環境づくりに努める。
- ・ 早生品種の防除は、粉剤または液剤体系とし、適期を逃さず、穂揃期（出穂3~5日後頃）とその7日後の傾穂期の2回防除を徹底する。
- ・ 麦あとほ場を放置している場合は、ほ場内の雑草がカメムシ類の繁殖好適地となるため、早急に耕起や草刈りを実施する。
- ・ 近隣に雑草地や麦あと不作付地等がある水田では、斑点米カメムシ類の発生が多くなる場合があるので防除を徹底する。
- ・ 例年発生密度が高い地域や防除後も水田内のすくい取り調査で侵入が認められる場合は、追加防除を行う。

イ いもち病

- ・ 現在、県内でいもち病の発生は確認されていないが、BLASTAM情報（農業研究所）を参考に、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。

BLASTAM情報（葉いもち予測システム）はこちらから
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）



ウ 紋枯病

- ・ 本年は7月5日に初発を確認した（前年7月5日、平年7月10日）。
- ・ 前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）または穂ばらみ期（粉剤、液剤等）の防除を確実に行う。
- ・ 本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表6）、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。

表6 紋枯病の防除要否判定時期（薬剤散布適期）と要防除水準

品 種	薬剤散布適期 （防除要否判定時期）	要防除水準 （発病株率）
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり	出穂7日前頃	(15%) ※

※「てんこもり」は基本防除とする。発病株率は追加防除の目安（暫定値）。

エ 白葉枯病

- ・ 常発地等では、出穂3～4週間前にオリゼメート1キロ粒剤を散布する。
- ・ ほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため薬剤を散布する。

オ 稲こうじ病

- ・ 常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

カ 着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・ 稲体活力の低下により発生が助長されることから、適正な施肥、水管理を行う。

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈はやや長く、茎数はやや多く、葉色は並、葉齢は0.3葉進んでいる。葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈、葉色は並、茎数は多くなっている。

幼穂形成期は、平年より1日遅い7月14日と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年より1日遅い8月5日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月9日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R6	5月17日	64.1	27.5	602	11.8	4.2	38.9	(7月14日)	(8月5日)
R5	5月16日	60.4	25.1	547	11.3	4.2	38.0	7月12日	8月2日
近年	5月15日	60.5	25.9	558	11.5	4.2	38.7	7月13日	8月4日
前年比・差	1	106	109	110	0.5	0.0	0.9	(2)	(3)
近年比・差	2	106	106	108	0.3	0.0	0.2	(1)	(1)

注1) R6：11ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、新品種実用化・プラ削減 対照区：7ほ場）

注2) 近年値：H29～R5の平均、本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

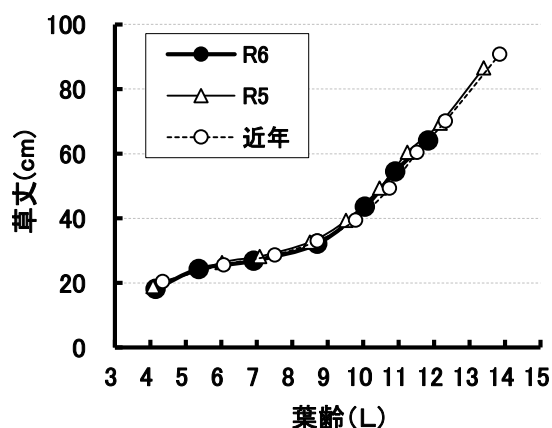


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

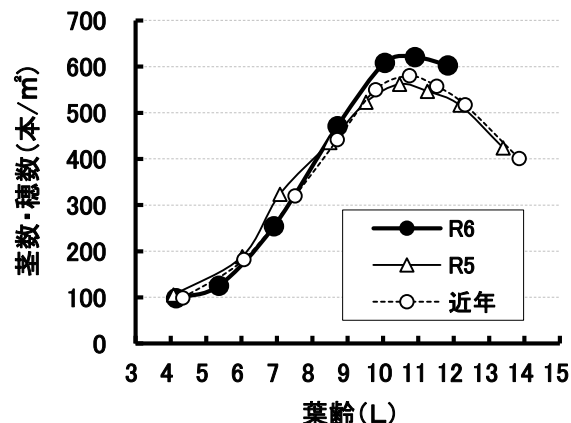


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

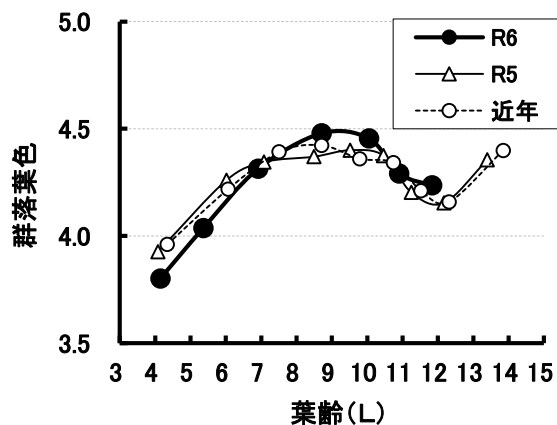


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

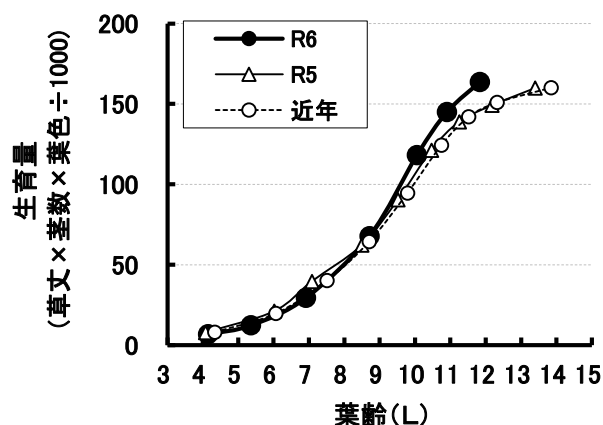


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

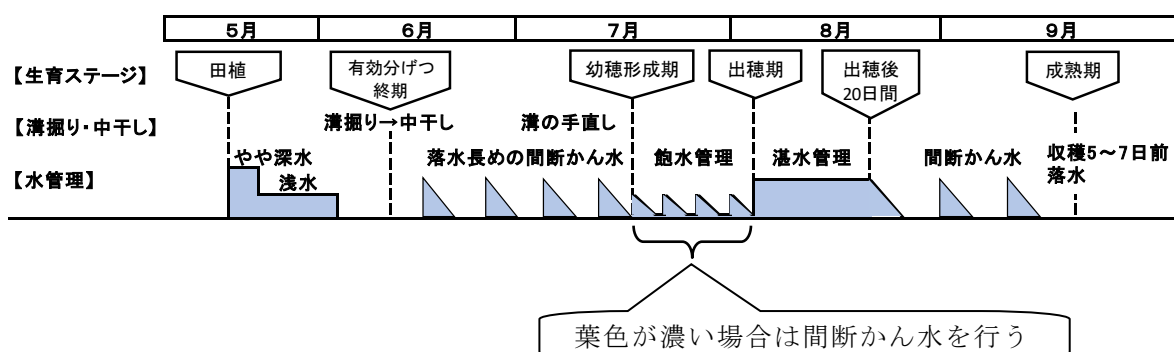
2 当面の技術対策

- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理を行う。ただし、葉色が濃い場合は、間断かん水を行う。

(1) 水管理

- ・ 過剰籾数を防ぐため、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期の SPAD 値 35（群落葉色 4.0 程度）に誘導する（表 2）。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。ただし、葉色が濃い場合は、間断かん水を行う。

<水管理のイメージ>



(2) 肥培管理

- ・ 肥効調節型基肥栽培では、原則、追加穂肥は施用しない。
ただし、幼穂形成期の 14 日後の SPAD 値が 32（群落葉色 4.2）程度と薄い場合は、出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追加穂肥を行う。
- ・ 分施栽培では、穂肥は生育量（表 2）に応じて、表 3 を目安に 1 回目を幼穂形成期の 7 日後頃、2 回目を 1 回目の 7 日後に施用する。

表 2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	m ² 茎数 (本/m ²)	SPAD	群落葉色	生育量	
				SPAD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量 SPAD : 草丈×茎数×SPAD÷10,000

群落葉色 : 草丈×茎数×群落葉色÷1,000

表 3 穂肥施用量の目安

幼穂形成期 の生育量	N施肥量 (kg/10a)	
	1回目	2回目
適正	0.75~1.0	1.5
過剰	0	1.5

(3) 病虫害防除

- ・ 病虫害防除はコシヒカリに準じて実施する。特に、「富富富」では、「いもち病抵抗性」を持続させるため、穂いもち防除（穂揃期）を確実に実施する。
- ・ ただし、生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が 12 以内となるよう留意する。